

tab

No.
18
2009/09/15

後藤美和子／石川和広／野村龍
長尾高弘／秋川久紫／福島敦子
高塚謙太郎／タケイリエ／倉田良成

楯 = *Machilus thunbergii*

cont.

詩篇

- 後藤美和子：コノハチヨウ／01
野村龍：言葉／03
長尾高弘：唄をうたっていた母／04
福島敦子：アメリカの家／05
秋川久紫：聖母像の意趣返し・情痴の時代／07
タケイリエ：老後／10
高塚謙太郎：高野／12

文

- 福島敦子：ひとりごと —あとがきのつもりで書いたけれど本誌のほうにまわった文—／17
石川和広：母との電話／18
倉田良成：もうひとつの南島 —清水あすか詩集『毎日夜を産む。』読解・前編／20
あとがき集／25

画：和田彰

tab 第18号／2009年9月15日(毎奇数月発行)

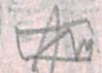
編集発行人／倉田良成

〒230-0078横浜市鶴見区岸谷4-25-25鶴見岸谷ハイツ201

Eメール／kateis11@k3.dion.ne.jp



No hay caminos,
hay que caminar


2009

後藤美和子

コノハチヨウ

あの人は今日

素手でやってきた

だから私を

捕らえに来たのではない

かつて投網を打つ

あの人の腕は腰に比して太かった

白い帯をほどき

仲間たちと魚腹を追った

鱗と鱗粉を持つあらゆるものが

その握力にひかれ

ピンで刺されて死んでいった

私は海の色になって

波間に砕けながらいつも見ていた

あの人は今日

素手でやってきた

秋の装いをして

苦しいように岩棚を歩いていた

擬態したチヨウの群れは

あの人の重みを確かめてから

崩れるように飛散した

水におぼれ

把手をつかむように

あの人は岸辺の砂に手をおいた
私はやつと可視の色になつて
手折れた指先にとまり
羽を閉じた一枚の落ち葉となつた

(皆既蝕四十九)

野村龍

言葉

朝顔のためらいの彼方に

霧は早くも立ち籠め

影のない戸惑いが静かに歩いて来る

自分の名前を忘れた呼吸は

翼をたたみ

亡霊のぬくもりのなかで睡りにつく

雲よりもおおきな鯨が

夜遅く ココアの底へ沈んでいく時

御使いは 言付かった香りを ゆっくりと放つ

瀧から

それぞれに与えられた歌が 惜しげもなく溢れ

錯覚は テントを畳んで

また旅に出る

蜂鳥の光を 森が含み 輝き

太陽系の撥糸を

司書がこのうえなく正確に巻き上げる

長尾高弘

唄をうたっていた母

目を閉じると、

若かった頃の母が、

誰に聞かせるでもなく、

唄をうたっている姿が浮かんできた。

団地のベランダに置かれた二槽式の洗濯機。

ガタガタと大きな音を立てて回っていた脱水機が静かになると、

ベランダの物干し竿に洗濯物を干していく。

大きな水玉模様のノースリーブのワンピース。

腋毛がふさふさとしていた。

子どもは変なところを見ているものだ。

唄っていたのは、何だったろう。

明るい子ども向けの唄。

自分の子どもに聞かせるというより、

自分が子どものときに習った唄を

子どものように唄っていた。

今どきこんな人は見かけないなあ。

かと言ってその前の時代にも、

こんなのだかな風景はなかったのかもしれない。

体が少しずつ動かなくなる病気で、

薬の副作用で苦しんで亡くなったけど、

母にもそんなときがあった。

もう誰も覚えていない。

私の記憶だって当てにならない。

現に、

唄っている声がどうしても聞こえてこないのだ。

福島敦子

アメリカの家

父が家の中を運動靴を履いて歩いていた
ついにわたしんちも

アメリカの家になったのかと思ったよん
急いで脱がすと台所のスリッパと並べて靴を置こうとするので
玄関まで持って行った

昔 美しいお母さんが
子供が裸足で外を走っていくのを
靴を持って必死で追いかけていたことを思い出した
年を追うごとに子供の育てにくさは顕著になり
そのお母さんはだんだんとやつれていった

今はどうしているのかな

あの日のお母さんが
今の自分と重なる

あるとき なんてかわいそうなんだと思っただけんど
そんなにあの人は不幸ではなかったのかもしれない
きつと

自分をたよりに生きている人間が愛おしくて
たまらなかつただろう
そして 空を見上げて
どうして神様 わたしなのかと泣いただろう

でもそれは幸せ不幸せでかんたんに語れるものじゃなかったんだね

土で汚れた台所の床を拭きながら

そう思った

おとうちゃん 靴は脱ごうな うちには日本やから

と言うと父は今始めて知ったという感じで

そうやったんか

と恥ずかしそうに笑った

秋川久紫

聖母像の意趣返し

聖性と

死の匂いにまみれた

女は 何も娼婦ばかりとは
限らず

晩秋の

慎ましき献立の

中身は 何時も乳製品と

果物だけとは 言えないだろう

白壁の

裏側に棲む

劣化と裂傷の 只中の

聖母像の

噛い

落葉に

包まれた

勇壮は

瑞々しき 豊饒の前に

膝を折り

圧殺した 歳月との

融合を願って

液化する

一枚のコインを

確定的に 軽化し
壊滅的に 無化させるための
因業な 使徒との
想念の闘い

純朴な

山羊たちは

司祭の忠告も聞かず

熱を帯びた 風情で

待つのだろう

放蕩娘の 帰還の

果てに

煤けた 画布から

抜け出す

迷える聖母像の

妖気に満ちた

やさしき 意趣返し の到来を

情痴の時代

白衣の

受難と

腕を組み

ミントグリーンの

破滅を

従えて

夢幻の街の

モディリアーニ展を訪れる

リンパ・ドレナージュより

遙かに 適切に

悪性の 願望を

排出してくれる

幼き

看護師との

他愛なき

指相撲

喧騒と

情痴の時代を

経巡りながら

不定形の

錯乱を

余すところなく

食べ尽す

深夜の女術たち

破廉恥なミツシヨンの

数々が 压榨され

切り刻まれて

横たわる

天上の寝台

その黒布に

山吹色の 猥雑な

終焉が 折り重なっていく

タケイリエ

老後

せなかがあえば

なにもかもうまくゆく気がして

せぼねを溶かし緩ませても

かさなりあわないのは

いったい かな型の問題でしょうか

玄関にねじこまれる

朝刊の紙上では

人々が炎上して

ことばは地にもぐって

みみずの声を発する

のを 踏みながら

われわれは角を曲がるのだ

冷えた顔を咲かせながら

今日も暑くなりそうだから

日陰を用意しなくちゃいけない

こんなにも沈んだ日は

わたしをトランクに詰めて

東北を旅してほしいのですが

注文よりずっと速く

ああ 日陰が来ました

太陽もずいぶん融通が利くようになって

つまらないじゃないか

誰彼なく弾道飛行をはじめたら
いい頃合いだななんて言って
爆発することを許すよ

そんなふうにも でも

われわれが老いぼれる日について

考えはじめると怖くなる

愛についてもおなじで

手が 伸びるか伸びないか

それだけのことに

きつと弱々しくなつて

犬みたいに淋しく尾を振るのだろう

高塚謙太郎

高野

自身の鳥、

入寂を期待されていたが、

惜しくも。

凄まじく唱えつつ尾羽冷え、

連綿と巣をつくる。

信号待ちの沙里は黒犬と擦れ違うことを厭い、車道へとはみ出し内輪の臍に沈み込んでいった。沙里の残したものはエコバックに潜り込ませていた大蒜の芽とケータイ、そして南海高野線特急「こうや」の使用済み特急券一枚だったが、後日すべてがヤフオクで競り上がり、沙里の御霊は浮かばれた。その金で「こうや」をひたすら往復させた。

自暴の基底すれすれに飛行するものを食う、そこで朝食を支度する。去来するだろう、腹は膨れない、どこぞの空家に押し入り、枕探し、智慧の指から逃走する昼飯時の飛翔は朝の飛行線をなぞり、茜色の夕食盛んに、これが去来だ。旅に出よう。

土からの身乗りだし車窓越しの、

舗装に点々と蠟石の描線、

それは小僧の手慰み、

もしくは女体。

の木乃伊の館を通過し、笑う。

夕暮れ時、李次郎は南海特急「こうや」から乗り継いだケーブル

カーで入山、路線バスのロータリーを横目に、厚手の紙袋をさらに黒く硬いビニール袋で収めた基郎の首を左手にぶら提げ、うどん屋を指した。むろんうどん屋には立ち寄らず、基郎の証を小藩家老の墓石の袂にちよんと置いてきた。翌朝までに野鳥野犬らの類が基郎の証の跡形をきれいに浚っていくとは、自動二輪の上の小僧は知るよしもなく、墓石にこびりついた液汁の跡をやがてみごとな苔類が覆った。

首塚は津々浦々、

その津々浦々は道々に列挙、

始末の末が挙げ句の果て、

から歩き始めると路線バスの隙を縫うように門に宿り少し覗いては黙礼し停留所付近の土産物店を出入りする。

猛然として。

章次郎は結婚していた。女の子をもうけたが、すぐに妻子は他の男と所帯を持った。内縁だったので、章次郎は結婚したことにはならなかった。先夜、仕事帰りに女の子の中学入学祝いに万年筆を匿名で送りつけた。今朝、万年筆は筆立てに刺さっているが、使われることはない。時代がそうさせた。

山門ほど近くの煙草屋の軒庇の影に小僧の自動二輪が沈んだ。呵成に煙草屋炎上、暗い暗い、山門は夕陽に沈む。その先頃、煙草屋の軒庇で唇を吸った偉夫はそれを知らず、山門の赤光を背に奥へ奥へ合掌し、吸いさしのキャスターを路肩に放る。偉夫の父々祖々はその先に葬られていない。遠い、としか。後ろでゆつくりと小僧が立ちあがる。

坂から。

果てしなく続く奥の院への夢々、

寒冷に寄せ合いながら進む。

横手の幾足かの宿坊群を過ぎ一言の度に温度が低まる。

既に頬は白い。

息は一言に乗らない。

ミシュランの及びを手挟み、

保たれる自認の中、

一羽の鷺の旋回を舐り落とす。

一行は底知れぬものを食う。

気取りの長閑な残滅、

山門から続くさすがの入場スタイル、

下山をあらかじめ備え、

息を効かせ、

鼻唄まじりに行進を連れね、

お出ましに。

ギターさえ弾ければ、と中途退学した宏道は、今夜子供を両親に預け組合のボーリング大会に参加しようかと考えていたが、途中で激しい腹痛に見舞われ、スーパーのトイレから半時間はまったく出ることがなかった。昨年の優勝賞品は五万円分の旅行券だったが、それもすぐにビール券に化けたのは、社内の誰もが知っている。そして今年も宏道を組合は優勝させビールをたらふく呑ませた。

いよいよ撞こうという頃合、

名乗り出てきたのは名のない親父、

学帽を阿弥陀に被り、

眼鏡の奥に黒い瞳をそろえ、

御来光の高鳴りすなわち入相の鐘の震えを高唱する。

體えた頭皮の御来迎を六十年代にスタイリッシュに誑かし、

つつ、

合掌。

低頭。

東夫は二十歳を迎える前に高野を飛び出すことになるのだが、宿坊のお膳を上げ下げする日々は既に修行の身、修行の時、と自動二輪を飛ばしながら下山のイメージを一方では膨らませていた。山に戻る途中、毛物を避けようとガードレールを乗り越え、転がり落ちながら、ああ下山だな、と硬く誓わせた。そう宿坊の小僧は予感させた。

彩り、

不穏に仇めいて、

速く速く、

それが凄まじく敢えなく、

色は死ほど確実に匂い立て込める一刺の恋慕、

その追憶は花か紅葉か狂いか落下か。

白身の魚、

入寂を否定していたが、

辛くも。

楚々と匂い立ち得ても鯉合わせ、

連綿と巣をつくる。

繁茂の先の善意、それは並木桜の散ってはいく花びらかはたま
た葉桜か、いずれの先端のドラマツルギーか、思案しかねる話
としかいいようがない。

喉の千本を捧ぐる

薄暮の群れて

春をえらばば

虚々と啼く鳥の

赤の不磨

繁茂の先の善意

その一間に宿りする懐手の男

掃き出しの網戸は静かに外され

庭に臨むは隣室の女体

耳だけは

耳が

歌わしめるものの

流れる液体に成分は

血

いつしか男は暗い石に

響鳴の摺り足

表へつつかけ

温度は凧ぎ

宿りする温度は凧ぎ

血だけがのぼせ上がり

腰をかがめゆつくりと

縁側はせり出す

しかし隣室はもぬけて

和尚の皺寄る掌から

婚礼を思う

何とも不安やるかたなくと招待を受け、手向けがてら赴いた山門は
高野。八葉のぐるりの頂の零度、そして今は零下の空すれすれに石
を重ね前進する経、いやいや初夜。

福島敦子

ひつらげん

―あとがきのつもりで書いたらけれど本誌のほうにまわった文―

家族のことを書くということは、どうかなああと考えている。

(『賤民の異神と芸能』谷川健一著より)

わたしはホームページ上の日記を長いこと書いたけれど、家族のことは書かなかつた。だからほんとに長い間わたしのことを独身だと思っっている人もいた。

子供のことを書かなかつたのはホームページを持った時、子供が既に思春期で書かないように言われていたからだ。その頃、幼い子供のことをあからさまに書いている若い女詩人もいたけれど、内容が本当のことであれ架空のことであれ、それはどうかなあと思っっていた。その人のホームページを今は見かけない。わたしが子供だったら、そんなことする母親のことは嫌いになるし、反抗すると思う。

そして、今、わたしは詩で父の病氣のことを書いている。これはどうかなあと思っっている。わたしが父なら嫌だ。

瞳が濁り、シャツもジャージもだらしくなく着てぼんやりしている父の前にいると、わたしはもしかして父の世話をしているのではなく神のお世話をさせてもらっているのかもしれないと思ったりする。父のことを書いているのではなく、神とのささやかな暮らしを書いているのかもしれないと思ったりもする。変わってしまった父の姿にある種の聖性を感じてしまう。

書いて欲しくない。

だんだんと症状が進んでいく自分のことなどどうやっておいてくれと思う。

それにしても、むやみに怒ったり、わたしに叱られてしゅんとおとなしくなる頼りない神である。わたしは、ささげて見返りは求めないという本当の信仰心に乏しいので、お世話をさせていだいた暁には見返りを求めそう

『神がみすぼらしい老人の姿で現われるのは、人間を試すためのものであるという話は世界各地の神話や民話に見られるが、1970年に、わたしが八重山で出会った五十がらみのカンカカリヤ(ユタ)から直接聞いた話に現われるのにおどろいた。「神はどんな恰好をしているか」という私の問いに対して、冥界との間を幾度も往復した経験があるそのユタは「神はぼろぼろの衣服を着て、乞食同然の姿で現われるが、それは人を試すものである」と言った。』

石川和広

母との電話

ここ二、三日、横になることが多かった。八月も終わりに近づいた日々。夏の疲れかどうかわからないのだが、とにかくよくスウィッチが切れていた。昼くたびれてうたた寝していて、気づくと夕方になっていた。八月の後半は、家の人が旅行に行っていて、ひとりで過ごすことが多かった。ひとりで友人のライブに行ったりしていた。あとは、今後のことを意識的に思うというわけでもなく、時々無性に気になって苦しんでいた。

生きている限り、時間の中にいて、あるいは約束とか日課とかいくつかの縛りというものがある。先々生きていかねばならぬというとき、その中に労働・仕事も入ってくるだろう。そういうことに論理的な筋道はわからないうが、疲れる感じがしていた。ただ暑さの中で眠ったり、ただもだえたりしていることが多かった。そういうとあるひとは「怠け者である」というかもしれぬ。そうなのである。ただ、こないだ母と話していてもそう感じたが、どうも自分にはそういう体質・気質があるのではないかと思えた。

母は子供の頃から、家の働き手と見なされていた。彼女（＝僕の母）の姉は勉強に主に力を入れたようだった。彼女の父は出張が多く、また彼女の母もしんどがり屋なので、よく愚痴を聴かされ、手伝いをいつけられたという。そんな中で、彼女自身はしんどいことや愚痴を人にとってほならぬという見えな縛りが心の中に生れたのだという。そんな話を聞きながら、僕もそんなところはあったなあと母にいった。で、質問したのだ。「お母さんはいつ頃自分が苦しいとき、苦しいといえるようになったん？」と。「そのとき何ぞくらいかな？ 僕は今三十五やからなあ。」と。

母親は考えながら「そうやなあわからんけ

ど、三十過ぎて、自分がしんどくなりがちやなどという自覚はもった。けど、それがいえるわけではないので、ニコニコしていたら、あんたニコニコしているなあと町の人にもいわれたなあ。でも年取って我慢する元気がなくなってきたからなあ。お母さん歩きの会に行くようになったやろ。五十過ぎて。そしたら、参加して最初の頃はしんどくなってもがんばって歩いていった。けど、それやったら倒れてしまいかもしれへん。そやったらみんなに迷惑かける上に、わたしも気を使うやろ。そやから、しんどくなりそうやったら、同じ仲間の人にわたし少ししんどいから、休んでいい？ っていうようになるたんや。」

「歩きの会」とは名所旧跡やちよつとした山を散策する会。最近よくある。母も体力が18衰えないようにするのと気晴らしをかねて週末参加しているようだ。僕も子供の頃あるいは大きくなってからも、しんどくなつた自分について話せずにいた。もう辛抱できないと、朝失神して保健室に運ばれたり、体育の時間などよく気分が悪くなつたのを思い出す。精神病になつた経路もそれに通じるものがある。母親と全て同じではない。ただ、自分の等身大の姿が見えるようになって、それに対して対処行動が取れるようになるのに、母の場合は五十年近くの歳月がかかっている。自分について知るということは時間がかかることなのだと思つた。それが大変な発見だった。それまで、母の話は僕に愚痴を聞かせているようにしか思えなかつたので、僕も母も何かが変わってきたのではないかと思つた。

「愛されたい」というのも「愛してくれ」というのも、あるいは「自分は苦しい」「少し待ってくれ」というのにも自己認識と他へ向かう力がある。その上大変な時間がかかる。そ

これは他者に向って自分の弱点を話すということだ。話してみると意外になんでもないことだと気づく。しかし自分の中にも、弱みを見せたくない意地や誇り、他者への警戒心もある。そこを解決するのにも、大変時間がかかる。いつも弱点を曝してはつけこまれることもある。母の場合ひとくちには「しんどいから休む」という当たり前のことだが、その中に様々な屈曲があつて、長い時間をもつて解決されてきたのだろう。いつてみればなんでもないことがたくさんある。働くや生きるの中でも、しんどい・苦しいあるいは楽しいといい、ちゃんと自分の事情を反映させることが大事だ。また、そこに気づくのも何回もの無駄足や躓きや派手さのない回心があるのではないかと思う。それを通じて得られたものも。

さらにそれを自分の問題と照らし合わせてみる。僕の場合、男性性や、生きている時代の違いがあり、母との相違も感じる。男にとつての自立は女性と少しちがう面もあるのではないか。ただ、共通するのは、「生きることの苦」という問題である。これはそれぞれ独自の、自分で引き受けざるをえない面がある。そこでいいがたいことがある。しかしその「苦」というものを否定的なものとして退けたりしないで、あるいは「ポジティブ思考」を単に適用するのになしに、(それに振り回されても)あくまで自分のこととして考えることの大切さである。逃げたくなるし、自分は何ぞこんな自分なのかということもある。ただ、そういう自分であることをここに存在するものとして、もち続けることである。もちろん気晴らしも場面転換も必要である。そうして、自分自身を一方では根拠地ともできる。そこから自分の生のあり方を粘り強く考えて探る。様々な点で、母の話はとても参考になると感じた。これから、自分の生活のプランを立てたり、生活を自分自身のものとして無理なくやる道をつけることができる可能性も出てくるかもしれない。母からは祖父のことも聞いたのだが、それはまたいつか。

もうひとつの南島——清水あすか詩集『毎日夜を産む。』読解（前篇）

2007年、はるかなおどろきをもって迎えられた清水あすかの第一詩集『頭を残して放られる。』は、八丈島に関係が深いと見られる向きの、とあるブログの言葉を借りれば、「——彼女の詩は、独特の文面で綴られていて、丸ごと地球を感じさせられ、その動めきを実感する。その中で生きる私達も、土の一部であり、地球人であり、宇宙と繋がっているんだと感じさせてくれる」ものという。だがそれはかつてそのように形容されがちであったある種の詩のナイーブさとは無縁である。彼女の詩の世界は、むしろ次のごときステートメントが相応しいのではないか。「願はくは之を語りて平地人を戦慄せしめよ」（柳田國男『遠野物語』冒頭）。むろん「平地人」は「本土人」と読み替えられるべきだが。

このたび初めて彼女から恵与された第二詩集『毎日夜を産む。』を一読し、その世界をつぶさに知るとともに、これには読み解くべき実に多くが蔵されていると、解説の要を感じた。

注意すべきはこの八丈語的発想とその表現を詩的な「異語」とする見方があるようだが、それは共通語的発想が直面する文化的衝突としての「異語」とするならば別だが、たとえば藤原安紀子やまして山本陽子などの「異語」と同じにはできない。清水あすかの言語使用には、詩的飛躍による表象や八丈語独自の発想はあるが、基本的にすべて共通語で解積可能と考えられる。これが第一であり、そこから導き出される第二点は、（あまりここに山本陽子を入れたくないが）いま挙げた以外にもいる、「異語」を用いる女性詩人たちが畢竟めざしたいのは巫性それ「自体」であり、それは自己自身をある種の高みへひき上げてゆく果てに自己収斂するだけなのに対し、清水あすかの言語にわれわれが（たとえ多少なりとでも）「戦慄せしめ」られるのは、彼女にある巫性が、自己に還ってゆくだけの言葉ではない、何か具体的なことを「他」であるわれわれに「託宣」する感覚があるせいではないか。何か大切なこと、そして厳粛で、何か怖ろしいことを。

そのことの実際が序跋をふくむ十五篇で見取ることができる。いまはその中から二篇を選んで、「解説」していつてみたい。そのまえにまず軽く序跋詩篇に触れておく。

*

まず集の序跋に相当する「今も裸足で書いた。」（序）と、「夕方を作る何百音に合わせ。」（跋）だが、ここには密やかなもの、小

声で伝えなくてはならない痛みに似た時間の圍繞がみとめられはしないだろうか。

帰ってくるために、ふとんを干しておいて入るとき少しでも空気が新しいように、

でもお話しを隠しとけるくらいには窓を開けて、わたしは帰る日のために、

ここを出るといふことは、ここへ

必ず帰るために。飾ってあった、それをいうために花は片付けず（「今も裸足で書いた。」）

わたしの体の経路を辿って書き写したら

それははつきり島の形をとって、読み上げるとき詩として響く。

年よりから聞いたことを、聞いたように耳から口移したけれど、

伝え忘れた一つを思い出し、わたしは臨終の際

声をあげる。「ああ」

「ああ」声をあげる子ども、それはぬめった肉になつて

小さい子どもの先にある十代に落ちてしまう

（「夕方を作る何百音に合わせて。」）

虚心坦懐に読めば、作者にとつてふるさどである「島」というものがいかに重大な存在であるかが痛いように伝わって来るではないか。この痛みは「島」の痛みでもあり、現在島に居住している作者の心が、帰ってゆく対象として同時にそれを想っているという矛盾撞着のありようこそ、すなわち「島」であることに烙印されたひとつの負性を意味しているようである。それは「島」という孤絶の地誌と、また日本のどこの地方にも見られる野蛮な都市化による固有の文化の破壊、およびそれが導く若年人口の流出という、冪乗された不幸であると言つてしまえば見も蓋もないが。総じて序にあたる最初の詩は、「帰りないぎ／田圃はまさに蕪れんとするにどうぞ帰らざる」（「帰去来の辞」冒頭）とうたった陶潜を思わせると言つたら人笑われもするであろうか。そしてそのような痛みの中に、かつ密やかにうたい出された冒頭に比し、掉尾の詩はある決意、確かな意思をしっかりと得るに至っている。私は思うのだが、この詩で二度出てくる十代というのは、いわゆるティーンズということではなくて、十世代という意味なのではないか。「指先とはそらすでなくやわくまるく形をとること。／それを見つけるのにもう何百年の時間をかけていた」という詩行も同じ作品に見るのだ。でもあるいは、「ぬめった肉」と十代の結びつきを考えれば、それは「子ども」の性的な成熟を意味し、何百年の時間と無縁なように生きている若者のことを暗示するとも考えられる。「ぬめった肉は「食べられる」ことで、実は島の「時間」を繋ぐものでもある、とも？

*

満ちたりや、海を出せ。

われは雲の奥から線に盛り上がる、向こうへと舟を出して行く。

父おやと母おやと、となりの姪とをまるく寄せ

むすめよ背中にしぼりつけ、やぎと子牛を座らせる。

ものを見ない。小石が岩にあたって鳴らす音。

夜に夜に聞こえる波の音。自分で土をまぜた畑、枝をひろって描いた道も。そこにあるうたの声も。われにはもろく聞こえない。

年よりは連つて出ろう。年年ねんねんに土のいろをするにおい、島のしわ。岩場に向かつて手をふって

何がある。かけられることばはかけて、足りないものすら捨ててきた。思われる。

思われるだろう。

この島を、われらがほかの誰が知っていたのだろう。

芝土手いちめんの天草が言いたしたか

干してすぐの赤か。乾ききった白か。

うたの声は時に飛びつづけても

海の途中で落ちるもの思っていた。

ただ少しの血でぬりつぶすよう体はすり集められ

ものを知っていくばかりで日々を重ねたはずが

われは今日になりなんで、なんでこがん何もわからなくなろだろう。

ああ、確かにこの島で足から生えて生まれてきたのに

われらは島を蹴りだして

蹴りだして、どこしやん行こだろう。

舟の上は大層ゆれるので

やはりおのおのがうたを歌うのだ。

島を見ながら放たれていくのに

島にいるがためのうたを歌うのだ。

はい、手をたたき、

たたいてしやん、声を出す。

はい、しやん。はい、しやん。

見ない見んない。われのことばに島はどこにも。

牛めがぐびり。

よだれをたらす。

わがあつとめはひっちゃばけ

みんな途中で終わろだろう。

ここから本格的な八丈語が混入してくる。

いくつか八丈語特有の言語について注釈めいたことを入れてゆく。のつけから興ざめなことではあるけれど。

「夜に夜に」というのはヨルニヨルニとはどうも読みにくい。すこしあとの第二連に「年年ねんねんに」と、わざわざルビを振った似たような畳語があることから、ヨニヨニと読むべ

きところなのではなからうか。清水あすかの詩に明らかに認められる内在律が、強く及ぼしている歪力から言ってもそう考えられる。声調と言ってもいい。ただし、これは八丈語で「夜な夜な」の意である可能性も。

「われ」は当然第一人称であろう。ただし詩の言葉としての第二人称の可能性を必ずしも排除しない。この「われ」が島の言葉であ

るか、共通語であるかは詩の前半では判断できない。詩に没入してゆくときに作者に訪れる、韻律的な居住まいの正しき、ともいうべきものから来ていることは確かだとしても。ただ、最終部で「わがあ」（吾が？）とあるので、最終的には八丈語であることが確認できる。

「年よりは連つて出ろう。」は、意味の方向性は判るがニュアンスまでは判らない、といったところであろうか。作者は本詩集ではおおむね「年より」という表記であるけれど（二か所を除き）、前詩集では「としより」という言葉を用いている。後者は舌足らずでもなんでもないと思ふので、変わず使つてほしいと思うけれど。「連つて」は「連れて」であることは、サイト「八丈方言資料」で確認できるが、「出ろう」の文法的職分がややわかりにくい。とりあえず「出よう」であるとしておく。

「思われる。／思われるだろう。」は、典型的な八丈語の用例をふくむ。もとより動詞の連体形と終止形の区別がない現代共通語と異なり、より古形を残すと思われる八丈語にはこの両者の区別が存在する。現代共通語で言えば「春に行くはずだ。」と「春に行く。」において、動詞に変化はないが、八丈語では「われには思われる。」という終止は、助動詞の連語「だろう」がつき、連体形となると「われには思われるだろう。」という形に変化する。すると、さきの二行のうち、「思われるだろう。」はわかるが、さいしよの「思われる。」がなぜ「思われる。」でないかという問題が出てこよう。この若い詩人の中に、まだ八丈語が生き生きとした生命を保たれてあるのなら、さいしよの「思われる。」の形は、「思われる何何」の形を内包しているはずである。この言いさし或いは言いさしそれ自体の断定的提示は、この詩の全体がノアの方舟のような脱出譚、「棄島」のような叙事をその一部とするものである以上、それこそその思いの埋蔵量、欠損そのものである絶対深度を、まさに活用をもって示したと、私は考えている。一方で、

実際の（発話時の）語尾の五十音的範疇からの逸脱という可能性も捨てきれない。

「この島を、われらがほかの誰が知っていたのだろう。／芝土手いちめんの天草が言いたしたか／干してすぐの赤か。乾ききった白か。」こういう箇所を読むと、その「具体」の在り方に、なにかまだ生きて伝えられている神話を聴くような心持ちになってくるが、八丈語的な表現としては「言いたしたか」というところが注目される。私は単純に共通語的常識の多くをしか持ち合わせてはいないが、「いたしたか」というのはやはり謙譲語ないしは丁寧語に入れられるべきかと思う。「この島を、われらがほかの誰が知っていたのだろう。」というすぐ前の行から察するに、「いたしたか」の「か」以下にもたまたまこまれる「か」は、疑問ではなく反語であろう。そしてそれが謙譲語ないしは丁寧語である場合、そこに見えてくるのは悲憤に似た表白だと思ふ。

「ああ、確かにこの島で足から生えて生まれてきたのに／われらは島を蹴りだして／蹴りだして、どこしやん行こだろう。」このなかの「どこしやん行こだろう。」の「しやん」は、八丈語において、方向を指す格助詞であるという。共通語に言い換えてみれば「どこへ行くだろう」ということになる。現代共通語の「へ」というより、もつと揺らめいている古形の格助詞「つ」、或いはそれに類する助詞に近いものがある気がする。なぜそんなことを言うかという、詩の終わり近く、次の数行を見るからだ。「はい、手をたたき、／たたいてしやん、声を出す。／はい、しやん。はい、しやん。」ここに見る「しやん」と先の「しやん」を、異なるものと考えるのはむずかしからう。あとのほうの「しやん」は、「はい、手をたたき」とあるように手をたたきさきまか、歌の合の手詞のようにも見える。しやんしやんというのは八丈でも手をたたきオノマトペである可能性があるが、そこに名詞や動詞等とは違った、抽象的な品詞である格助詞「しやん」の揺らめきが声となって共鳴して

いる感じがする。「島を蹴りだす」「われら」
にとつて、揺らめく格助詞「しやん」が、不
定の方向をさししめす「うた」のようにひび
くことがあるのではないか。ちなみに八丈の
古謡に「しよめ」とか「しよめい」とかとい
う合の手が入った歌があるが、これはそれ
とは関係があるか、ないか(『八丈島古謡 奥
山熊雄の歌と太鼓』による。笠間書院、20
05年刊)。

「牛めがぐびり。／よだれをたらず。」この
「牛め」というのは別段牛をさげすんでいる
わけではなくて、八丈語では「め」が(動物
につく)接尾語であること、東北語の「こ」
(べこ||牛)、沖縄語の「ぐわ」「がなし」に
同じである。ただし、さげすみの接尾語「め」
(奴)ももとは由来を同じくするものとも考
えられるが。

「わがあつとめはひつちやばけ／みんな途
中で終わるだろう。」この二行は前のほうの行
がわからない。「わがあつとめ」は「吾が生業」
ということだろうか。「ひつちやばけ」を探索
してみると、一項だけ甲斐方言に同じものが
あり、「破けること」であるらしい。そういえ
ば、神奈川の言葉でも「ひつちやぶけてる」
という言葉はある。流人がもたらした言葉
であるとも、甲斐、相模あたりと八丈にたま
たま残存している古形の言葉ともつかない。
ただその意味で考えると、また詩の全体から
見て、わが祖たちから何百年と続いてきた日
々の暮らし——それはある意味で信仰と道徳
によって保たれてきた、それゆえに単なる暮
らしというより、ツトメである——それが破
れ、島は島から解纜し、出航してさまよって
ゆく。わたしに課せられ、恢復させなくては
ならない「島」という時間のあてどない漂流
から脱出することは、わたしの今生で終わる
ものではない。

おおよそ詩「満ちたりや、海を出せ。」を、
私はこのように読んでみた。詩のタイトルで
あるが、これはまるで額田王の「熟田津に舟
乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出
でな」の歌のようではないか。繰り返しによ

うだが、この舟(島)は、どこへ行くともあ
てどないさまよいではあるけれど。(つづく)

confidence

明日はフェリーで桜島に渡るのだとタクシーの運転手に言ったら、「よして下さいよ。でもまあ、いい経験になるかもしれないね。よかつたらFAXで感想でも送ってください」と、とてもニヒルな返事が返ってきた。翌日レンタカーで上陸し、展望台に向かって走っていたら、次第に前方がカーキに曇り、いきなりバラバラと音がしてフロントガラスが黒い斑で染まった。サイドガラスも同様だった。でも車全体が真っ黒くなっているとは、言われるまで考えつかなかった。(後藤)

渋谷の文化村ザ・ミュージアムで「だまし絵展」を見てきました。目当てはアルチンボルドでしたが、日本の浮世絵師たちの作品が面白かった。歌川国芳は裸の人間が組み合わさって大きな人間を作っているというちよつと気持ち悪い絵など。歌川広重は影絵の指南書。どれも、「町人」の気分で満たされていて、それがよいと思います。絵のたとえば「みかけがこはるがとんだいゝ人だ」というタイトルとか「大ぜいの人がよつてたかつてとふといゝ人をこしらへた」とかく人のことは人にしてもらわねばいゝ人にはならぬ」という文句だとか、いわゆる文語体ではなく、江戸時代にちゃんと口語の文体はできているじゃないかというところも収穫(落語本などでも、そういう文体を見かけましたが)。(長尾)

とにかく多忙な一夏でした。茹だるような気構えの日々でした。そのため詩作は完全に滞りました。

うまくいけば、近く詩集を作ります。既に具体的な作業に入っています。原稿を整

理しながら、「これを出してしまうと、もう書けないのではないか?」と、怖じけますが、今秋か来春には。(高塚)

今、私の頭の中は、猫のことで一杯です。12年連れ添ってきた「べたる」は、慢性腎不全という大病を得ながらも、そうと教わらなければ解らないほど元気です。ところが私は浮気をしていて、オリエンタル、という怪猫のことで、頭がいっぱいなのです。(オリエンタルについては、皆さんインターネットで調べてみてくださいね。)

シャム猫にロシアンブルーを掛け合わせて出来たのが、怪猫オリエンタル。なにゆゑに「怪猫」なのかと言えば、猫という我々の通念をとつもない規模で凌駕するその甘えん坊ぶりなのです。べたるは、ご飯の時は「愛してる愛してる愛してる」と宣言ものの、私がべたるを太らせるために丹精込めてこしらえた「デュア・ラ・フランス」をもりもりと平らげてしまうと、お気に入り一角に場所を移し、素知らぬ顔で身繕いなどを始めます。ところがオリエンタルという猫種は、目が覚めたときから眠るときまで、ひたすら人間につきまとい、「構って構って構って」と、人間を乞い求める、と言うのです。

猫と言えば「孤独」。そのイメージを、粉塵になるまで破壊する驚異の甘ったれ、オリエンタルに、今週末、出会います。続きは次号。(野村)

この夏は、東京で単身遊び、ウミユリの化石を探し、ブルーベリー(百二十本)の収穫をしそれを市場やカフェに売りさばき、日食は家から車で五分の天文台で観たし、充実と話題に満ちて、退屈も倦怠もなく無事に過ぎました。高原地帯の秋は早く、この号が発行されるころは新米を食べています。(タケイ)

今年の夏は災害が多かった。兵庫県佐用町の様子には非常に衝撃を受けた。母や父の生れた四国の町にも避難勧告が出たようだが、なんとか河川の氾濫などは免れたようだ。夏一番の読書は内村鑑三の『代表的日本人』だった。タイトルも内容もナシヨナリスト的な雰囲気がある。実際そうなのだ。内村自身は最初は日清戦争を日本にあって「義のある戦争」と位置づけ主張していた。しかし途中からその戦争のありように疑問を感じ非戦論に転じる。その過程の以前以降に、様々な日本の歴史上の人物について書いたのがこの本。そう思うと趣き深い、複雑な本だと思う。(石川)

冷房病になっています。暑いのに身体が冷えています。あつたかいお風呂に入っただけとぬくもり、身体の調子を整えます。汗をたくさんかき、あー気持ち良かったとまた冷房をつけてしまいます。(福島)

18歳の頃、たった3ヶ月程度でしたが、吉野弘が講師を務めていた池袋の西武カルチャーの「詩の教室」に通っていたことがありました。まだ詩を書き始めたばかりの拙い私の作品の詩行に吉野は「ここが生硬」などと赤ペンを入れ、背伸びを試みたり、近代詩人のスタイルを単に真似たような表現を見つけると、その安易さをその場で正確に指摘してくれたことを覚えています。当時、私は吉野のような実存的社会派的な詩よりも鮎川信夫や吉岡実などの詩に惹かれ始めていたため、その指導の正しさを直観しながらも、内心素直にそれを聞けないような所がありました。その吉野が長年住んでいたはずの北入曾を離れ、最近静岡県富士市に転居したらしいことを知りました。3年前に私が第一詩集を出した時にも私の私信に吉野からの返事はありませんでした。

した。今年、既に83歳となる吉野が最近執筆活動をしているような様子はなく、その健康状態が気にかかります。(秋川)

無いと思っていたものが有った、という経験がこの夏たてつづけにした。

ノーノのCDも、無いと思っていたものが部屋の片付けで出て来た。未開封。いつ買ったものか、全く覚えていない。

No hay caminos, hay que caminar...

は、ルイジノーノ作曲「進むべき道はない、だが進まねばならない」(和田)

東博の平成館の右隻というのか、館の半分を会場にして開かれている「伊勢神宮と神々の美術」なる展示会に行ってきた。それこそ弥生古墳時代の生活(感)がそのまま続いているような展示品にも改めて驚かされたが、もっと時代が下って中世や近世初頭の神仏習合思想に注目した。瑞祥的表現をふくむこの一種の凄まじい感覚性は何であって、一体どこから来たものであろうか、と。(倉田)